

Saint-Exupéry の政治的立場について

両 角 克 夫

小 笠 原 真 一

Saint-Exupéry の政治的立場については、現在迄、断片的指摘はありながら、包括的な検討の対象にはなっていないのであるが、この小論において、fascisme, communisme, anarchisme, démocratie, についての Saint-Exupéry の考えを辿って、彼の政治的立場を明らかにしたい。このような研究はそれ自身として意義あるものであるばかりでなく、《Vol de nuit》の Rivière, 《Citadelle》の首長の正しい像を把握するのに役立つという意味で、Saint-Exupéry においては特殊な意義を持つのである。

Saint-Exupéry は、如何なる政治的立場をとっていたと考えられていたか？一般の人々からは左翼系の人、共産主義者と見做されていた⁽¹⁾。又ある批評家は socialiste chrétien と規定している。左翼であることは、まず異論のないところであるが、H. E. Crane は Rivière の思想を民主的でないと非難し⁽²⁾、S. Losic⁽³⁾は、同様に《Vol de nuit》の思想に独裁制の響きを聞きとっているのである。この小論では、このような指摘に私なりの解答を出したいと思うのだが、その為に次のような方法を採用したい。《Vol de nuit》は小説であり、《Citadelle》は Berbère 族の社会を舞台とした虚構の作品である。虚構の作品である以上は、作品に表明された思想を作者のそれと同一視することは許されぬ筈で、作者の生の考えをそこから抽出するにはそれなりの周到な手続を必要とする。読者は虚構の作品の中に常に象徴を読み取ろうとするものであるから、《Vol de nuit》や《Citadelle》に fascism の独裁政治を見るのも、communisme の独裁政治を見るのも自由であるとも云えよう。しかし、このような解釈の多岐性を克服して、作者の真の意図へ到る方法の一つは、なまのまま表白された思想を参照することである。幸いにして、Saint-Exupéry の場合は《Carnets》があり U. R. S. S. と Espagne のルポルタージュを読むことが出来るのである⁽⁴⁾。ここでは虚構の作品を、出来るだけ避け、これらの資料を調査することによって、Saint-Exupéry の政治的立場を明瞭ならしめたい。

従って、明らかめられた政治的立場が、《Vol de nuit》《Citadelle》の解釈にどのような照明を与えるかについては、ここで論じない。又この小論の主題と関係ある、Saint-Exupéry の第二次大戦における政治的位相については、別箇の検討を必要とする大問題であるから、ここでは触れないことをお断りしておく。

* * * *

1931—39年の時期に、Saint-Exupéry は、U. R. S. S. へ一度、Espagne へ二度（市民戦争下の Espagne）派遣されて、ルポルタージュを書いた。彼はジャーナリズムに使役されて自分の書きたいものを言わず、才能を擦りへらすことを恐れていた。それにも拘らず出掛けたのは、貧窮した財政に強制されたばかりでなく、1917年共産主義革命に成功し、着々と

国家建設に励み、共産社会という人類の夢が実現されたかと世界の知識人の注目するところとなっていた U. R. S. S. と、人民戦線政府と Franco の争う Espagne をみずからの目でしっかりと、見とどけておきたいと考えたからに他ならない。この三度の旅行と二度のドイツ旅行は、communisme, fascisme の社会をしかと観察する機会を与え、彼の思想に政治的・社会的視野を開き、彼自身の個人的苦悶を人類的視野で解決することを志向させた。

I

1935年4月29日から、約一ヶ月 Moscou に滞在し、その見聞録は Paris-Soir に掲載された。

このルポルタージュの筆致は冷静であり、Saint-Exupéry は U. R. S. S. を『情熱をかきたてることなくして語ることの出来ぬ国』⁽⁵⁾と評しているが故に『情熱』のために、感嘆するにせよ、敵視するにせよ、とにかく偏見におちいらないように決意しているようである。

全体として、抑制された讚美である。純粹の描写の中に皮肉の錐を潜ませている箇所をいくつか指摘できるし、永久的な戒厳状態、監視、国内旅券、集団への隷属などは、はっきりと『耐えがたいこと』と非難している。しかし、すぐに一つの社会の建設のためには、不可避なものであると理解するのである。さて、どのような社会が建設されているのか？ Saint-Exupéry の見た U. R. S. S. とは次のようなものである。『すでに、私は見ぬいていたことだが、そこには、個人に対する非常な軽視と共に、個人をこえて、永遠に存続しつづける人間、その偉大さを築き上げることが、何よりも問題とされている人間に対する非常な尊敬の念がある⁽⁶⁾。』『個人を通して永遠に存続しつづける人間』を築き上げる社会、これが彼の見たソ連である。従って、あまりに苛酷な規律も不自由も非人間性も、それを抱摂し、超越する大いなる目標の実現の名のもとで、是認されている。しかしこのようなソ連観はあまりに Saint-Exupéry 的であり過ぎるようだ。上記の文は『古昔の民の指導者は、或いは人間の苦痛に対し、あわれみを抱かなかったかもしれないが、人間の死をあわれんだ。個人の死でなく、砂の海が消し去る人類の死をあわれんだのだ⁽⁷⁾。』という Rivière の瞑想を思い出させる。『個人を通して永遠に存続する人間』は《Pilote de guerre》の《l'Homme》を予測させるし、『個人』(l'individu)と『人間』(l'homme)の対立も、Saint-Exupéry の思想の『要め石』となるものである。更に、『指導者』(le maître) Staline に見出ししているものも、『よき僭主』(le bon tyran)⁽⁸⁾の化身であり、Staline の姿に、Rivière と《Citadelle》の首長をオーバーラップさせることが出来るのである。かくのごとく、世界のインテリゲンチヤは U. R. S. S. を巴れの願望を通して見たが、Saint-Exupéry も彼の『決意』にもかかわらず、彼の思想を通して、あまりに Saint-Exupéry 的な U. R. S. S. を描いてしまっている。

Saint-Exupéry は『人間の創造』と『個人の尊厳』のいずれを尊重するかによって、人々の U. R. S. S. 観は、さまざまな階梯があると云っているが、Saint-Exupéry 自身の立場は一貫して『人間の創造』にあるから、U. R. S. S. に好意的である。しかしながら、それが虚像にすぎないこと——『個人』の軽視と見えたものが、実は『人間』の軽視であり、『人間の創造』は実は『集団の創造』にすぎないことに気づく。その時期を決定することは難かしいが、1936年以降に書かれた《Carnets》のソ連観は、否定的立場が強いところら

見て、このルポルタージュ発表後1年ぐらいの間に転向が起ったと見てさしつかえない。

Saint-Exupéry と communisme 批判には階級観念が古くさくなっている、Marx は集団の理論家であり、人間については Pascal の方が知悉していた、といったものがあるが、その中で重要なのは『群衆』(la masse) をめぐる断片である。

Saint-Exupéry は、群衆とは『最も進化の遅れ、最も文明化されず、最も洗練されない、成長能力を持たぬ人間の範疇』⁽⁹⁾と考える。物質の分野に属し、精神の範疇に属する学者、芸術家に対立する。『すばらしき民衆』という言葉に Saint-Exupéry は当然反撥する。群衆を讃美するのは『しあわせなエゴイストよりも、苦しみを共にし合う人間の方が、より人間的である。』限りにおいてである。群衆とは『人間』の段階引き上げてやらねばならぬものである。communisme のプロレタリアートの支配というものは『群衆の意志』による『群衆の政治』であり、『最も低級なものの支配』である。『群衆のエリートに対する優先』『物質の精神に対する覇権』の政治である。

従って、『プロレタリアートの歴史的使命』という『目的論』を承認しないのも当然である。『マルクス主義革命はどんなんな人間がそこから生れるか考慮せずに世界を整備する(事物の神化)。私は銀河と銀河系の壮大な沈黙を経て、何百万年ののち「プロレタリアートの歴史的使命」に達するなどという考えがすばらしいとは思えない。別の尺度がある筈である。「プロレタリアートの歴史的使命」とは何だ。私はそんな目的論は認めない⁽¹⁰⁾。』

ここで『別の尺度』と云っているのは何か？ 云うまでもなく『精神』の尺度である。Saint-Exupéry の夢想する社会は『群衆が詩人に仕える』『精神の帝国』である。『精神の上部構造』を至上価値とするという意味で、Saint-Exupéry を精神主義者(或いはもつと精密にいうと進化論的精神主義者)と規定することが出来るだろう。

Saint-Exupéry は共産主義革命が人間を貧困から救わんとする意志を認めないのであろうか？ 彼はパンの問題を『緊急事』、精神の問題を『重要事』と呼んで区別する。緊急事はなるほど重要ではあるが、精神の欲求を満すことの方がより重要であると考え。Saint-Exupéry には『悲惨さへの嗜好』⁽¹¹⁾(le goût de la misère) と云うべき性向があり、貧困が人間を疎外するよりも『精神の要請』を生き生きと感じさせてくれるという意味で Saint-Exupéry は積極的な意義を見出ししている。これは彼が真の貧困を知らない為に違いないが、同時に、彼の生活した環境から、資本主義社会の『肥えたやから』がどれ程非人間的になりうるか、富が結局人の心を豊かならしめるものではないことを身を持って知っていたということでもある。これには更に彼の砂漠の生活の影響が加っている。『修道院の生活』を送っているながら、生涯で最も美しい時代と回想しているのである。『精神の上部構造の重要性を何も感ぜずに、喰べ、産して人間を永遠ならしめようとする君は一体、私をどこに導うとしているのだ⁽¹²⁾。』『食料は必要であるが、饑饉よりも危険である⁽¹³⁾。』

精神の問題を閑却した政治万能主義が、U. R. S. S. 批判の中心にあるが、精神主義者 Saint-Exupéry にとっては『政治は精神的明証に奉仕して、始めて意味を持つものである⁽¹⁴⁾。』魂の問題と物質の関係は又このように述べられている。『人間を幸福にしてやると称する政治上の主義も、僕らにとって果して何の価値があるであろう。もし予め僕らが、その主義がどんな型の人間を幸福にするか知らなかったら。誰が生れるのか？ 僕らは食糧があれば満足な家畜ではない。また僕らにとっては一人の貧しい Pascal が埒もない富豪の出現などよりずっと価値があるのだ⁽¹⁵⁾。』まず『宗教の種まき』がなされねばならない。精

神の孤独を癒やす『概念』が創造されることが、まず必要である。『宗教の偉大さ、効果は、目標となる精神的人間像を樹立してから革命の問題を問われた点にある。人間が一旦創られれば、その人間が世界を整備するだろう⁽¹⁶⁾。』彼のイデオログとしての進む方向もこの宗教的な方法であったから、物質・政治が人間を救いうとする思想に真正面から対立するものである。彼の批判の矛先は *communisme* ばかりでなく、政治と内面の信仰良心を分離して、物質の跋扈を許す中性国家も、*nazisme* にも向けられる。この中で比較的ミステックなのは Hitler 主義であるが、これは低級なのである。

Saint-Exupéry の志向するのは、platon 風の哲人政治か、中世・ルネッサンスの神政々治のごときのものであったと云えば、あまりに突飛であろうか。しかし《Citadelle》は独裁的な神政々治という点、その構造を同じくしているのである。もっともこれは虚構として書かれている点に充分留意する必要がある。

この時期に Saint-Exupéry が *communiste* 或いは、左翼系と世人から信ぜられてきたということは、以上の如く見てくるならば、*communisme* にせよ既成左翼にせよ、およそ既成政治団体に属していたということは考えられないことである。J.-C. Ibert は『政治的には、キリスト教社会主義に傾いているように見える⁽¹⁷⁾。』と云っているが、恐らく正鵠を射たものであろうが、それは決して既成政党を指すのではないのである。彼も『政治固有の領域の外にいた。』と結論づけている通りである。1930年代という知識人と *communisme* の蜜月の時代に、Saint-Exupéry が *communisme* に懐疑的であったのを、彼の思想的甘さに帰してしまうのは容易であるが、実は、彼が精神主義を固持したところこそ最大の理由があったのである。精神主義者は決して *communisme* にも *fascisme* にも誘惑されることはないのである。

およそ、Saint-Exupéry の抱懐する政治思想か、アナクロニクであるにせよ、ユトピックであるにせよ、反時代であったのである。

II

Saint-Exupéry は Allemagne へは二度行っており、第一回目は1937年3月、第二回目は1939年——戦争直前のことであった。これには特別書きのこしたものはないので、*fascisme* については《Carnets》を調べる以外に方法はない。

Saint-Exupéry の *fascisme* 観の特色は、*fascisme* の魅力をはっきり認めていることである。その魅力とは、国家という『自己の外にある目的』を神化するナショナリズムは『ミステック』であるところに由来する。『祖国とは馬鹿馬鹿しい考えではない。少なくとも宗教のイメージに於ける神以上に馬鹿馬鹿しいものではない⁽¹⁸⁾。』『ミステック』なものを失い、意味を失った人々の苦悩する現代に於いては *nazisme* とは歴史的必然である。このような *fascisme* の魅力を分析しえたのは、Saint-Exupéry のイデオログとしての意図を、低級であっても、*nazisme* が実現せるものであったからである。*fascisme* が彼の孤独や不安を癒すものとして、幾分なりと心惹れなかったと云えようか。『愛国主義によって文明の幾つかの価値を守るのは全く自然なことであると思うが、文明の価値が外国によってなく国家の進展によって脅かされるならば、それを救うために外国と協同することも又首尾一貫せる考え方である。定義しがたい共通のエゴイズムに立った愛国主義はナンセンスである⁽¹⁹⁾。』これは独仏協力による『文明の価値』の救出ということではないのか？ そう解釈

することは、あまりに恣意的という誘りを免れがたいであろうが、Hitler があまりに『愚かな』ばかりに祖国といった低級な目的や『汎独主義，ローマ帝国のミスチック』といった古くさい『人間をくろう偶像』を蘇生させて、戦争を惹起し、世界を混乱させ、『創造すると主張する人間を先だてて逆殺してしまい』『生きたいという欲求』に正しい解決法を与える機会をみすみす逸したことを Saint-Exupéry は憤り、惜んでいることには間違いない。『この見方（群衆が詩人に仕える社会）は fascisme の視点であることもあり得る。しかし fascisme は閉鎖経済の上にその文明を基く。そのために総合を成し遂げることが出来なかった。そして個人の権利と尊厳を守るために Ford の愚行を守ってしまった⁽²⁰⁾。』この文章には今述べてきた彼の感情が読みとれるのではないか。

fascisme がある『人間典型』を救うと認めた上で、Saint-Exupéry はそれが『意識の階梯』のごく低い段階のものであることを批判する。『Hitler の体系がドイツの夢を実現したということは、ドイツ人の（精神の）要求がささやかなものであったということを示しているにすぎない。ドイツが意識の階梯を高く昇ったことがないということだ。それにも抱らず Hitler の理論が人々を転回せしめたのは、それが総合に似かよったものであったからである⁽²¹⁾。』さらに国家主義が時代遅れになっている点をつく、『(……) 国家主義者は単にその祖国にある種の愛を感じているだけの人間ではない。彼は一種の勝負事をしている人間に他ならない。換言するなら、自分の中から或るタイプの人間、即ち世界的であろうとする人間を救いあげようと努力する人間である。生命のたたかいと淘汰のためのたたかいに赴く人間。献身。犠牲におもむく人間、おのれ自身の偉大さを帝国によって象徴し、その帝国のうちにあつてひとしお生甲斐を感じずる人間。一口に云えば、それは或る種の尊厳をかちえんとするものである。(……) しかしこれはある人間の型の問題である。ここにおいて再び概念はいかに高貴であっても、時代遅れに（効力なく）なってゆく。何故なら人間の偉大さはまた芸術、科学、図書館にあるからだ。ところが、使命を実現する方途そのものが、由来破壊的であるから、こういう使命という概念が人間の偉大さを脅かすのである。今日戦争では、勝負はたかくつきすぎ、自分が創造しようと思う人間を、先に殺戮してしまう⁽²²⁾。』結局 Saint-Exupéry は精神主義・進化論的精神主義から fascisme を裁いている。

この点に直接関係あるものであるが、Saint-Exupéry の非難の的となっているものに、fascisme の『概念』としての非有効性である。Hitler は『私は（世界を）簡単にした。』と自負するが、(Saint-Exupéry によれば『概念』『言語』は世界を単純化するものである。)、それは実は自己と相似ざるものを排除し抹殺して創り上げた秩序である。『概念』とは相矛盾する要素をまとめ上げて、一つの総合を創造するものである。もし総合がまだ生成しないときには、予盾に耐え、意識はより高級な総合を行う。一方の項を捨象するのは悪しき単純化であり、精神の進歩はありえぬと主張するのである。

III

Saint-Exupéry は Espagne 戦争には参加しなかったが、2 度にわたって人民戦線側の Espagne を探訪し、その報告を l'Intransigeant と Paris-Soir に発表している。このルポルタージュの中で、アナキスト達の行動を書き留めているわけだが、Saint-Exupéry が、アナキストを非難するのは主として次の三つ——精神的遺産の破壊、悪平等主義、『木を切るように』安易に行われている銃殺、である。前の 2 つの点については、すでに Saint

-Exupéry の政治的立場の根本にあるものとして挙げた、精神の優位と群衆が詩人に仕える社会という二つのテーゼから、必然的に演繹されるものであるから、贅言を費す必要はない。ここで問題にしたいのは銃殺についてである。l'Intransigent に発表されたルポルタージュにおいては、『人間の不可測性』とも云うべき思想が力強く打ち出されている。この思想は、人間の中には『大天使の破片』(l'archange épars) があるとか、人間は l'Homme の『大使』(l'ambassadeur) 『道』(la voie) 『乗物』(le véhicule) であるとかと表現されているもので、《Carnets》に於ては、すでにこの『人間の不可測性』の観点から、communisme も fascisme も裁かれているのである。『1人1人の個人は1つの帝国である。』『1人の(生き埋めの) 鋤夫は千人の人命に価する⁽²³⁾。』という考えは、いかなる理由によっても、たとえ革命の名によってであろうと、殺人を許すことはできないという、反殺人の思想——R. Martin du Gard や (Les Thibault の Jacques) A. Camus の思想——を当然の帰結とするのである。即ち Saint-Exupéry は、アナキストに——ひいては Espagne 革命に、『人間の尊崇』のゆゆしき無視を認め難じているのである。

この反殺人の思想は、U. R. S. S. のルポルタージュにあらわれていた考えと、微妙に違い違っているようである。Saint-Exupéry がある裁判所で会った判事について、『この判事は個人の判断で人を裁くことを許さない。どんなことにも躓いたことのない医者に似ている。それが無駄でなければ手当にもつとめよう、しかし自分はなによりも社会に奉仕するものなのであるから、手当が無駄だとわかるときには銃殺してしまおうとする医者である。』⁽²⁴⁾と書き、『軍隊の中で統制がとれなくなったような場合、みせしめに銃殺もおこないます。』⁽²⁵⁾という判事自身の言葉を書きつけている。このような社会主義建設のためには、人命の犠牲も辞さぬ U. R. S. S. を Saint-Exupéry は、肯定と否定の間をゆれき動ながらも、終極的には、肯定していた。ルポルタージュにおける U. R. S. S. 観と《Carnets》のそれへいたる軌跡——1つの転向をふくむ軌跡を再び、ここに見出すのである。

しかしこの間の推移を、Devaux のいうように⁽²⁶⁾、人間と個人のいずれを重要視するかという観点から見るのは、あやまりである。この二者のうち、『人間の創造』を最も重要視することは Saint-Exupéry にとって既定の事実であり、問題はこの人間を築き上げるに際して、人命を犠牲にすることの可否である。従って、いかなる目的のための個人も、人間の偉大さの建設と絶対的に相いれないというのが、変身せる Saint-Exupéry の立場なのである。これを『貴族的ユマニズム』(Albérès) から『Tolstoï 的博愛主義』(Simon) への変貌と云うことも出来ようが、いずれにしろ、Espagne のルポルタージュ (l'Intransigent 発表のもの) が1936年のものであることに注意すれば、1935年から1936年にかけて、Saint-Exupéry の内面に於て、急激なる、精神主義への転回がなされたと云ってよい。

これは、言葉をかえて云えば、急速にアナキストの心情が清算されたということである。Saint-Exupéry は、アナキストを断固批判しながらも、密に同感を感じていたことは、次のごとき、一見無関係な文章にも、明らかに見てとれるのである。『彼は (Malraux) (… …) 偉大さの感情、彼が呼吸できる唯一の風土、即ベテンに対する闘しか見ない。ブルジョワのエゴイズムに対する闘。月並みに対する闘。悲惨に対する高貴なる怒り。これらすべては、神の中にその要石を見出しえなくなったために、定義することが至難となってしまっている。というのは、多分この矛盾はアナキストの運動によってより、教会又は、聖書の予言者によって容易に救いうるものであったからだ (… …)。』⁽²⁷⁾初期の冒険家の Malraux を

アナキスト Malraux としてとらえ、キリスト教的目的論をその反指定として据えるこの独特の Malraux 観には、Saint-Exupéry の内面の問題が如実に反映したものであって、我々は、この Malraux 像に Saint-Exupéry 自身の姿を認めるのである。又、『アナルシックなもの』(l'anarchique) と『精神的なもの』(le spirituel) との葛藤については、彼の『恋人』に与えた手紙で、次のように明言している。『はっきり云って、le spirituel が感情と相剋する場合が何度かあるのです。そうでなかったら、今頃私はアナキストになっているでしょう。アエロポスタルの乗組員の雰囲気は私は再び Espagne 戦争の間に Barcelone のアナキストに見出しました。(……) 感情の面では私はコミニストにも Merimoz にも、自分の命を捨てることを受諾するすべての人にも、反対するいかなる理由も持ちません。(……) しかし、人間の即位を成遂げるためには、私は Catalogne のアナキストを信じません。』⁽²⁸⁾『感情と精神的なるものとの相剋』は Saint-Exupéry に一生涯付きまとった問題であったが、初期の瞬間の昂揚に生の意義を求める傾向は、漸次拭き取られていった。それが≪Vol de nuit≫から≪Terre des hommes≫へいたる進展で、この時期は、精神的なるものの感情に対する、『建築家』(Simon) のアナキストに対する抑圧の過程である。『抑圧』と私は云ったが、事実あくまでも『抑圧』であって、内面に住むアナキストは決して抹殺されはしなかったのであり、≪Citadelle≫という作品がどうしても書かれねばならなかった所以である。この事実は≪Citadelle≫を政治的象徴として解釈する時に十分銘記しておかねばならない。Saint-Exupéry が自己を感情的にはアナキストと規定するとき、彼のダイナミックな政治的立場が姿を現した。アナキストの心情が精神を凌駕するならば、彼の政治的立場は完全に逆転する筈のものであり、精神主義により一元的に貫徹されているかに見えた彼の政治的立場も、実は l'anarchique に対し le spirituel が、危く優位を保っているところに成立しているのである。

IV

démocratie 批判は≪Pilote de guerre≫においてなされている。(勿論≪Carnets≫に於てもなされている。) 一般に fascisme に対する démocratie の戦いの証言と見做されている≪Pilote de guerre≫は、démocratie 弾劾の書でもあるのである。Saint-Exupéry が crédo の中で正統ユマニズムの頹廃したものと考えているのが、はっきり名付けられてはいないが、démocratie なのである。彼は démocratie に於ては、平等・尊敬・友愛・自由・慈善・謙譲・自尊などの徳目は、平等は同一へ、『自由は他人を害さぬ程度に好きなことをすること』、友愛は『相互間の寛恕』、慈善は『貧者の感謝を要求する取引』となってしまう、その意味がまったく墮落してしまっただとして、正統ユマニズムの復興即ち l'Homme を絶対の座に据えることによって、以上の理念を定義しなおすのであるが、これこそ、Saint-Exupéry がユマニストとして、企図するものに他ならないのである。それ故 Saint-Exupéry の野望は、démocratie の克服、広く云えば個人主義の克服と云ってよい。以上は結局、démocratie が人間の孤独——Saint-Exupéry が、一生を賭して、果敢なたたかいを挑んだ人間の孤独を深めるにすぎないという非難である。

進化論的精神主義者としての Saint-Exupéry の面目は、次のような démocratie 批判の中にも端的にあらわれている。『démocratie は明らかに、統計学的蓋然性、エントロピーの増加、エネルギー分散の極限までの権力の分割の方向へ向う。そして、それは結局人間

の見掛けだけの解放に到達する。たしかに見掛けだけの解放である。それは個人の解放以外の何物でもない。何故なら、人間は解体されてしまうからである。』⁽²⁹⁾ エントロピー、エネルギーなどといった物理学の用語を用いているが、これは群衆とエリート、群衆と詩人とを対立させ、エリート・詩人を優位におくという、いつもながらの論法である。しかし、エントロピー、エネルギーという言葉は、単に比喩的に使用されているのではなく、彼の宇宙進化論の知識に裏打ちされたものであって、『生命とは、Eddington が云うように、冬に火を起し、夏に氷を作るものである。』⁽³⁰⁾とか『生命とは、もっとも有そうにない状態へ赴くものである。』⁽³¹⁾などという言葉でわかる通り、エントロピー、統計的蓋然性に反抗する『英雄』(Bergson)の中に Saint-Exupéry は進化の原動力——l'Homme へ向う人間の最高の顕現を見ているのであり、démocratie が、そのような『英雄』の出現を抑圧する体制である点が、もう一つの Saint-Exupéry の非難してやまぬところである。

結語にかえて

Saint-Exupéry が政治的現象を観察する際の大きな特色は、その発想が文学者的、誤解を恐れずに言えば宗教的であることである。常に政治問題を精神の問題に還元し、政治現象に人間のあり方の苦悩の表現を見てゆく。『火の十字架』や人民戦線の政治運動も Saint-Exupéry にあっては、その具体的、現実的、政治的、経済的側面は捨象されて、『存在のあり方』の運動となる。前述の如く、fascisme は孤独に苦しむ現代人の形而上的欲求に答えるものとして取られていたし、démocratie も単なる政体としてでなく、思想体系として考えられている。このような見方は、一般論として、正しい面も、あきたらぬ面もあるわけだが、Saint-Exupéry の場合は、独特の意義をもっている。

Saint-Exupéry は現代のイデオログとして、絶対への献身と絶対によって結び合された人間の友愛を重要視したから、彼のかかえていた問題は、政治的な視野で解決せねばならなかったのである。彼が政治体制をすべて批判するとしても、それは決して個人的枠内の解決を主張したのではないのであって、Saint-Exupéry の目ざすのが、人間関係の中での幸福であることに変わりはない。この意味で彼の立場がまことに政治的であるとも云えようが、他方、政治によって、精神の問題を世俗化することによって、一元化するのではなく、『政治を精神的明証性に奉仕』させるという方向で、いわゆる政教一致を目指したのである。この意味では、Saint-Exupéry の政治的立場は、政治の外にあったとも云えよう。いつれにせよ、彼の政治現象に対する発想も、人間関係を『精神主義』によって秩序だてるといふ、Saint-Exupéry の政治的立場に深く結びついているのである。

(昭和41年9月30日 受理)

注

- (1) M. Migeo : Saint-Exupéry, p. 160
L. Werthe : Tel que je l'ai connu, p. 152
- (2) H. E. Crane : L'humanisme dans l'oeuvre de Saint-Exupéry p. 64
- (3) S. Losic : L'idéal humain de Saint-Exupéry
- (4) Un sens à la vie 所収

- (5) *ibid.*, p. 53
- (6) *Un sens à la vie*, p. 57
- (7) *Vol de nuit* (Bibliothèque de la pléiade), p. 121
- (8) *Carnets*, p. 60
- (9) *ibid.*, p. 59
- (10) *ibid.*, p. 54
- (11) *Un sens à la vie*, p. 59
- (12) *Carnets*, p. 27
- (13) *ibid.*, p. 539
- (14) *Lettre à un otage* (Bibliothèque de la pléiade), p. 40
- (15) *Terre des hommes* (Bibliothèque de la pléiade), p. 244
- (16) *Carnets*, p. 53
- (17) J. - C. Ibert : *Saint-Exupéry*, p. 106
- (18) *Carnets*, p. 24
- (19) *ibid.*, p. 77
- (20) *ibid.*, p. 67
- (21) *ibid.*, p. 96
- (22) *ibid.*, pp. 83-4
- (23) *Un sens à la vie*, p. 110
- (24) *ibid.*, p. 57
- (25) *ibid.*, p. 58
- (26) André-A. Devaux : *Saint-Exupéry*, pp. 35-6
- (27) *Carnets*, pp. 62-3
- (28) M. Migeo : *op. cit.*, p. 160
- (29) *Carnets*, p. 16
- (30) *ibid.*, p. 172
- (31) *ibid.*, p. 176

Summary

La Position Politique de Saint-Exupéry

Katsuo MOROZUMI et Shinichi OGASAWARA

Cette petite étude est un essai d'élucider la position politique de Saint-Exupéry, lequel, lui-même, ne possède pas seulement de valeur indépendante: grace à cet éclaircissement doit se mettre en lumière la signification véritable des deux oeuvres fictives en butte d'explications arbitraires: "Vol de nuit" et "Citadelle". C'est pour cette raison que les oeuvres fictives laissées, je n'ai pris comme objet de ce thème que "Carnets" et les reportages sur l'U. R. S. S. et la guerre civile espagnole.

On pourrait dire, tout d'abord, que la politique au sens large du mot se situe au centre de l'humanisme de Saint-Exupéry, car Saint-Exupéry en tant qu'idéologue du temps moderne vise, avant tout, à vaincre la solitude dont sont atteints nos contemporains, en remplaçant un Dieu chrétien par l'Homme et en restaurant l'amitié parmi les hommes.

Mais étant donné la primauté que Saint-Exupéry accorde à l'esprit sur la matière, il prétend qu'une politique n'a de sens qu'à condition d'être au service d'une évidence spirituelle. D'où vient, pourrions-nous ajouter, sa négation totale des idéologies politiques et de leurs réalisations: le communisme, le fascisme, l'anarchisme et la démocratie. Saint-Exupéry les condamne dans tous les cas au nom de la primauté de la superstructure spirituelle, qui, selon Saint-Exupéry, se fonde sur la direction dans laquelle s'avance l'évolution. Ainsi pourrait-on qualifier l'attitude à l'égard de la politique de spiritualiste, mieux encore, de spiritualiste évolutionniste.

Pour finir, il est à remarquer que comme il l'avoue lui-même dans une lettre, il se sent attiré par l'anarchique. Si le sentiment anarchique réprimé au fond du coeur ne cesse d'être en litige avec le spirituel, la position politique exupérienne, apparemment stabilisée, repose en réalité sur celui-ci qui a fragilement le dessus de celui-là.